

『保育者養成校における 1 年目のピアノ授業での指導法について』

—ソルフェージュのクラス授業における 1 つの試み—

大石 綾子
渡邊 愛里
木住野 睦子

‘On the Teaching Method in the First Year of Piano Lessons at Nursery Teacher
Training School ‘

—One Trial in Solfege Class —

Ayako Ohishi
Airi Watanabe
Mutsuko Kishino

キーワード：保育士、ソルフェージュ、リズム練習法、付点のリズム、ピアノ初心者

Key Words : Childminder, Solfege, Rhythm Practice Method, Rhythm of Dotted Note,
Piano Beginner

要約：本学の学生は入学して半年後に幼稚園実習に行くことになる。実習先で弾く機会の多い日常生活の歌には、初心者には難易度の高い付点八分音符と十六分音符の付点のリズムが使われている。このリズムを、ピアノ個人レッスン授業と同時並行でおこなわれているソルフェージュのクラス授業にて強化することにした。ここでは、リズムを理解し、次の段階への課題を見つけ、実技へ結びつける方法として考察した。

1 はじめに

本学の1年次のピアノのレッスンとしては必修である音楽(1)ピアノがあり、1クラス3～40人の学生を複数の講師で分け、1人の講師に対し6人ほどが90分内で個人レッスンを受けている。更に90分を半分で区切り、個人レッスンを受けていない45分はソルフェージュのクラス授業を並行して行っている。試験はピアノ実技、ソルフェージュにおいてそれぞれ年に2回実施している。また、これを履修するためには1年間でバイエルⁱⁱ終了程度、童謡弾き歌い3曲をマスターする必要があるが、入学時にピアノ実技の試験はないため、初心者から10年くらいの経験者まで幅広い学生がいることになる。

2 問題点

2-1 現状の問題点

幼児教育学科第一部の学生は1年の11月に幼稚園実習、2年の6月に保育所実習があり、1年の11月にはピアノの経験の浅い学生はバイエル終了程度までいかずに実習に行くことになる。そのため実習園で弾く機会の多い園の生活の歌ⁱⁱは早い段階で弾くことが求められる。そしてこれらの園の生活の歌には、ほぼ全てに初心者には難易度の高い付点八分音符と十六分音符の付点のリズム（♪♪）が使われている。バイエルでまだその付点のリズムの課題のところまで学習が到達していないにもかかわらず、弾かないといけない状況になるので、とにかく早い段階でこの付点のリズムをマスターする必要があるといえる。耳で聞き覚えて弾くことは、ピアノ演奏をマスターするのに完全には推奨できないが、練習期間、そして保育士になるまでの期間が2年しかないこと、頭で理解してゆっくりマイペースに丁寧に弾いていても実習園の現場では子供たちと歌うという意味で全く役にたたない、などという問題点を踏まえ、1年生のある程度譜読みはできてきた後期に、実習やこどもの歌に多くでてくる付点のリズムの強化を試みることにした。歌の中のリズムということで、頭で理解すると同時に歌とつなげてとにかく身体と耳でも覚えるように理解するという方法を試すことにした。ピアノを弾く時は、音の高さを読み、リズムを読み、それをどの指で弾くか、という3つのことを一度にやらないといけない。これは慣れていない初心者にとっては大変な作業で、通常どれか1つが疎かになってしまう。普段の個人レッスンでは、講師が丁寧に1曲1曲と指導しているので、今回はその1つであるリズムだけを抜き出してソルフェージュのクラス授業においてリズム強化を行う事にした。これは最終的には保育現場において園児たちと楽しくリズムにのって歌えるという事を一番の目的としている。

2-2 実態調査

今回のリズム強化の対象は幼児教育学科第一部1年の2クラス、幼児教育学科第二部1年（第二部は夜間部）の1クラスの計114名において実施した。（以下、クラス①クラス②クラス③とする）第二部の夜間部は昼間に働いている学生がほとんどで、練習時間が少ない、などという第一部の学生より音楽的にも時間的にも不利な状況であることが多い。

事前に属性を確かめるために学生たちにアンケートを取ってみた。アンケートの結果、半数以上の学生が入学前にピアノの経験がない初心者が多いが、入学後に個人的に習う学生は少なく、学校の授業である週一回90分と各々の練習のみで必要な曲を仕上げなければならないという現状があることがわかった。また、週の半分以上は家や学校で一人で練習に取り組む学生が多いが、初心者が多いため、音やリズムを理解することに時間がかかり、中には練習をどう進めるべきかやり方がわからない学生もいる。そして、正しいリズムがわからず間違えたまま練習をし続け、気付いた時には修正することが難しい学生も多々いることがわかった。自主的に練習に取り組む学生が多いことから、一人でも練習を進めていけるよう、よく使用されるリズムパターンや音符の長さなど基礎的な知識を勉強する機会があると上達が早くなると思われる結果だった。

2-3 対象者の調査結果

前期のピアノ個人レッスンのメイン教材として『教職課程のための大学ピアノ教本』(教育芸術社)という教本を使用している。この教本はバイエルを中心に作られており、初心者にとって譜読みの基礎や指の動かし方・使い方を短期間で習得するために必要な課題である。この教本を大きく3段階に分け、前期終了時の進路を調査してみた。

- 1、中間部のみの音指替えなし リズムは四分音符、八分音符
 第一部生 8% 第二部生 8%
- 2、1オクターブ高い音がでてくる 付点四分音符
 第一部生 63% 第二部生 74%
- 3、 楽曲として難易度があがる 十六分音符 付点八分音符 3連符
 第一部生 29% 第二部生 17%

前期終了時では、童謡でよく使用される付点のリズムパターンを教本で学んでいる学生が第一部生では約3割、第二部生では約2割という少ない割合にとどまっている。童謡を弾く上で必要なリズムは、初心者にとってハードルが高く、ある程度時間をかけなければ習得が難しいことであることがわかる。リズムの違いを理解して弾きこなせるようになるためにいろいろな角度からのアプローチが必要であると言える。

3 研究方法

3-1 目指す目標

杉山祐子(2013)¹⁾は、実習で使う園の生活のうた以外にも一般的な童謡のリズムパターンを調べたところ、最も多く使用されているリズムパターンは四分音符、四分休符、二分音符、二分休符のパターンであるとし、これに八分音符、八分休符、付点八分音符と十六分音符の付点を加えたら7~8割の曲を網羅していることになるという。今回は入学して半年で行く最初の実習で困らないようにするために(1) ♪ のリズムを理解し、なおかつテンポよくたたける(2) このリズムを身体で覚える(3) ♪ と ♪ のリズムの違いを使い分け、これが両方とも1拍の中にはいつているということ(♪=♪=♪)を理解する、の3点にしぼり、まずこのリズムパターンの習得に特化することを目標とした。この形をみたらすぐスキップのリズムをたたけるようにすることができるように、個人レッスンとは別に、クラス授業の集団の中で流れにのって習得することを目指している。集団でやることによって、微妙に違う隣の人とのリズム感や音量などに慣れ、実際の園で様々なテンションの子供たちの中で音楽を演奏するという事の類似体験になる。そして仮に間違えても集団でやっていると止まらずにどんどん進むことになるので子供たちを前にして一番重要な「音楽を止めない」という練習にもなり、個人レッスンでは得られないものを習得できると考えた。また、個別に一人ずつのチェックも実施しそれぞれできない所の理由を考え指導し、さらに次の課題を作っていく事とする。実施期間は2017年9月~2018年1月とする。

3-2 ソルフェージュのクラス授業におけるメリット

1番目のメリットは集団でリズム練習をすることによって、自分1人のペースではなくある程度の流れを意識していけることである。みんなで歌っているその感じをリズム練習しながらも感覚で感じることができる。途中で間違えたとしても、流れにのって止まらずに進んでいくということに慣れてくる。これは保育現場で最も必要なスキルの1つである。2番目のメリットとして、少し自信のないピアノ歴の浅い学生を引き上げてあげられるということがある。この時期では、特に経験の浅い学生はまだ自信がなく人前で演奏する事に慣れていない状態であるが、「自分以外の他者が達成している様子を観察する事によって自分にもできそうだと感じる事ができる(木村聡, 2015)²⁾」という点において集団のメリットを使うことができる。また、クラスの中で、短く簡単なハードルを下げたリズム問題の課題を繰り返し行い、たくさん類似問題をやる事によって小さな成功体験や達成感を積み、自己効力感があがり、そうすると自己に対して信頼感や有能感がうまれるということもあげられる。

ピアノの練習は日々の練習が不可欠ではあるが、それには当然ながら自律的に自分で練習することが必須である。吉村淳子(2014)³⁾によると、経験の浅い学生は、主に個人のピアノのレッスンにおいて少なからずとも経験者より混乱や消極性、恐怖感を持っているということなので、この自己効力感をあげていけるとモチベーションもあがってくると思われる。動機付けには様々なものがあるが、「仕方なくやる練習より自律的に『ピアノが楽しいから』という内的動機や『将来役立つから』という同一化的動機を持つことが自律的練習と上達への近道である(別府祐子, 2016)⁴⁾」ということから、少しでもそういう方向へ傾いていける手助けにこのクラス授業がなればよいと思われる。アンケート結果からもピアノの経験の有無にかかわらずピアノがうまくなったらこんな曲を弾いてみたいという気持ちを多くの学生が持っている事がわかる。「保育者養成校ではこの同一化的動機が平均値より高めである事が報告されている(別府, 2016)⁵⁾」が、本校でもその傾向はみられる。斎藤美和子(2010)⁶⁾による新規採用の幼稚園教諭に行った「養成校でやってよかったこと」「養成校への提言」のアンケートでも、圧倒的に「弾き歌いの練習」という事だったので、まだ個人レッスンではバイエルをメインでやっているこの時期に、クラス授業では現場に対応する弾き歌いの学習に繋げるようにしていくことが大切である。音楽経験の少ない学生は「集団では他律的になりやすい(別府, 2016)⁷⁾」といわれているが、保育士という目標を持っている養成校では将来役立つと思いながら学習していく同一化的調整や楽しく学習するという事が自律的な動機付けを促進し、わずかながら自信が付き自己効力感があがると思われる。指導者側はそれらを意識した指導と声掛けが授業の中でも必要とされる。

3-3 研究構想

そもそも付点のリズムは1拍を3:1でわけののだが、それを頭で理解しても、ピアノの音となって出すことは難しい。特に付点と八分音符が交互に入ってくれば、両方付点になっていたり、付点のリズムが甘くなっていたりしてもわからない。付点八分音符が4分の3拍というのは頭の中だけのことで、それを身体で表現するのは考えていてもでてこない。「リズムの語源は『流れる』という意味である(呉曉, 1987)⁸⁾」ように、正確さはもちろんだが、正確にゆっくり頭で把握すると同時に、流れもまた大切であるといえる。特に保育の現場では子供たちが楽しく歌えるように引っ張っていけるようなリズム感のある演奏が好ましい。そのため、最初は四分音符をタン、八分音符をタタと教科書にあるように覚えるのはよいが、そのうち1拍ずつ目で追っていかず少なくとも1小節くらいはパターンとしてひとまとまりで読譜できるとよいと思う。特に高校生くらいからピアノをはじめた生徒の初心者には1拍ずつ目で追う傾向がみられる。「譜読みには『リズムをパターンとして認識させる』と『五線上の音の並び方や位置を読み取る』という二つの要素がある(呉, 1987)⁹⁾」。何かを見て認識するとき全体像をみてパッととらえる力を「パターン認識」というが、付点のリズムを頭で理解するより身体で覚えるために、リズムにおけるこのパターン認識を意識したリズム練習をある期間の毎回の授業で試すことにした。大きくまとまって1小節を読み取れるように、短い課題を数多く繰り返し行ない、それに階名をつけて既存の童謡の形にして音楽とリズムを結びつける、という方向でつなげてみる。今回は八分音符と付点のリズムに特化して問題を作成した。杉山(2013)¹⁰⁾による、童謡の9割は2拍子か4拍子でできているということ踏まえ、第1段階として2拍子、4拍子の園生活の歌、季節の歌などのリズムから問題を作成した。また、「八分音符は比較的できるが付点のリズムはピアノの点数が低い学生ほどできない(内田恵美子, 2016)¹¹⁾」という結果もでていたので、付点のリズムの強化を主にしていくことにする。

4 実践 —リズム練習と結果—

4-1 リズム練習1

まず♪と♪♪のリズムになれるという事で【図1】のように2~4小節でリズム練習1を作成した。これは童謡の一部からの抜粋で、リズムが出来たら【図2】の図1に階名を付けたら何の曲になるか、楽譜を目で追うのみで確認し、更にドレミで歌ってみるという順にした。【図1】のリズムだけをたたく練

習は、メトロノームで一定の拍を流しながら、全員で何度もリズムをとり ♪ と ♫ のリズムに慣れるというやり方ではじめた。速さは最初はゆっくり確認するが、流れるリズムという事で童謡でよくでてくる速さの $J=90\sim 100$ くらいの速さで流すことに各クラスで統一した。【図 1】のリズムがたたけるようになったら【図 2】をみて【図 1】に階名がつくとどうなるか、そしてそれが何の曲なのかまず楽譜を見て頭の中で再生して曲をあて、そのあと歌って確認する。

リズム練習 1	リズム練習 1 に階名がついたもの
① 	① 
② 	② 
③ 	③ 
④ 	④ 
⑤ 	⑤ 
⑥ 	⑥ 
⑦ 	⑦ 
⑧ 	⑧ 

【図 1】リズム練習 1

【図 2】リズム練習 1 に階名がついたもの

4-2 リズム練習 1 の結果と考察

【クラス①】まず、八分音符と付点八分音符を使ったリズムの確認から始めた。わかっているつもの学生が多く、実際確認をしてみると曖昧であった。1 拍への入れ方が単独で理解できたところで、図 1 のプリントを行った。リズムを単独で理解していても、同じリズムパターンが何拍も続くと一度ではできない学生が多かった。繰り返すうちに、複数人でリズム打ちしたこともあり、理解している学生に引っ張られるように習得した。その後、実際の童謡曲に練習したリズムがどう使われているのか図 2 を見ながら確認すると、自らの力で知っている曲と一致させることができた。何気なくピアノで練習していた曲もどういうリズムパターンが使用されているのか把握し、理解し直すことができたように思われるので、リズム単独練習は効果的であった。四分音符の後に付点のリズムが入ると、拍にうまく入れられていなかったことが次回への課題となった。

【クラス②】第 1 過程として、リズム練習 1 先ず全員で試みた。クラス②は比較的出来る学生が力を発揮する為、周りの学生もつられて乗せられながら行なえた。全員でリズムを手で打ちながら表現し、ある程度揃う迄繰り返すが四分音符、八分音符等易しい物は 1 回でクリア出来る。リズムは繰り返し打たせる事で身体が覚えてくれる事を期待して、テンポ良くリズムに乗って学習させる様に試みた。付点が入るとリズムが易しい物の様に揃わなくなるのが課題。出来ない学生に関しては個別に聞けるのが好ましい。個別に聞く事でリズムの捉え方が分かるので、その学生に合ったアドバイスが出来る。第 2 過程として、リズムにメロディーが付くものを全員で手で打ちながら表現。流石に知っているメロディーのリズムだと分かると音量もアップして譜面通りになる。分かっている学生は笑みを浮かべながら一緒に歌い始めた。歌詞と一緒にリズムを覚えてもらうのも 1 つの手段になるので学生にアドバイスすると理解を示した。メロディーから自然にリズムが身体に入ってくると理想的で他の曲に出て来た際に応用が利くと効果が表れた事になる。

【クラス③】まず四分音符と八分音符のみの練習をした。四分音符をタン、八分音符をタタとリズム

の確認をして手拍子でリズムをたたき始めた。少し拍から遅れる傾向が見られたので手拍子より机をたたいてリズムをとって見た所だんだんと全員の拍が揃ってきた。

その後付点と四分音符のリズム練習では、付点は四分音符と同じ長さという事で、四分音符の拍を刻みながら行った。何となく拍には入っていたが連続して付点がでると後ろの十六分音符が曖昧になる。半数くらいの学生において十六分音符が曖昧な為、ピアノの鍵盤で実際に音をだして試してみた。実際鍵盤で音をだすと、ピアノを弾いている感じになるため十六分音符が揺れる所や弱くなっている所を理解したようだったが、付点が連続すると遅れがでる傾向があった。また、クラス①と同様、四分音符のあとの付点は乱れやすく、完全には拍を身体で刻めていないようだった。リズム打ちの後、図2をみたら弾く前に曲名をあてられた。頭の中で階名とリズムの再現は知っている曲ならできるようだ。

4-3 復習1とリズム練習2

【図3】<復習1>

まず前回リズム練習1の復習【図3】復習1をしてみる。リズム練習1は童謡のある一部を使っていたが、復習1はリズム練習1のできなかった反省点を

【図4】<リズム練習2>

参考に、オリジナルで作成した。参考にした主なポイントは八分音符の方は所々連続の部分を入れ、付点八分音符は四分音符を間にはさみ、付点の前後に入れたものを作成した。前回の目標である、八分音符と付点が四分音符の拍の中にきっちりと入るかどうかポイントである。

次のリズム練習2は付点（♪）と八分音符（♪♪）がまざっているリズムを作成した。それぞれのリズムだと、勢いでたたけるようになってきても「おべんとうのうた」などではこのリズムが交互にでてきて、たいていどちらかのリズムがあやふやになることが多いため、1つの課題にこの2つのリズムパターンをまぜる課題にした。この練習も実際よく使われる童謡の一部から出題している。上4題はリズムのみ、下4題はそのリズムに階名を付けたもの、そして曲名をあてるという点はリズム練習1と同様である。ここで次の過程として左手で四分音符のリズムを刻むという両手での練習も徐々にいれていく。

4-4 復習1とリズム練習2の結果と考察

【クラス①】図1のプリントの復習から行ったが、感覚を取り戻すのに時間がかかった学生も多かった。何度も繰り返すことで、頭で理解するというより身体で感覚でリズム打ちができていたように思われた。一回目で苦手であった、四分音符のあとの付点のリズムパターンは数回かかったが、習得できた。

次に、二回目の練習課題として用意した、図4のプリントの練習をしてみた。前もっての練習をせず、自力で取り組んでもらったところ、見本を待っていたり、できる子の様子を伺う学生が多かった。一度見本を見せたり、言葉でリズムの入れ方を言ったり、ピアノと一緒に弾くなど、リードをすると、つら

れるようにマネをし次第にできるようになった。メトロノームで拍子を取ったりピアノで拍を刻んでいたにもかかわらず、段々リズムが詰まってテンポが速くなったことが気になった。拍の均等感と、リズムをきちんと刻めることが課題として残った。片手で四分音符を刻み、そこに練習したリズムをどう入れるのか実感できることが次の目標課題である。

【クラス②】リズム練習2のプリントを2つのグループに分けて全員でのリズム打ちから試みた。四分音符と八分音符に関しては比較的正しく打てるものの、付点八分音符が含まれる事でリズムが揃わなくなり拍間を保つ事が出来ないと言う結果が生じた。その後指導者が四分音符のコードを弾きながら拍間をはっきりさせる事で改善へと繋がった。2段でのリズム練習として練習2に左手を四分音符で刻む練習を試したところ両手でのリズム打ち、上下を2人で分けて(上下交代を含め)のリズム打ちは思ったよりスムーズで、周囲の学生も関心を示していた。お互いが聞き合えて拍間も確認し合えるのでリズムの強化には有効である。得意な学生と不得意な学生を組み合わせる練習も効果的である。付点のリズムが童謡等のメロディーに出て来た時に効果を現せるかどうか今後の課題となる。

【クラス③】まず練習1の復習を特に模範もなく始めたが四分音符と八分音符の弾きわけはできていた。付点になると感覚を忘れていた学生も多く、付点の連続の部分ではかなり乱れていた。見本を見せて感覚を思い出してもらおうと揃い出す。手拍子だと付点の後ろの十六分音符が曖昧になると次第にリズムが遅れるので机をたたく方向で何度かやってみた所、ほぼすべての学生が揃ってきた。ぴったりとみんなのリズムが揃うと盛り上がり学生同士で協力しあって練習していた。次に練習2の八分音符と付点があざまっている課題を ♩ = 80 くらいあまり遅くないテンポでいきなりやってみたが4小節中3、4小節目になるととたんに乱れてわからなくなる学生が続出した。その為再度見本をみせて確認したが、見本がないと感覚がとれないようであった。見本をみて感覚をとるとというのは1つのパターン認識なので最初の段階では致し方ないと判断した。乱れる原因として拍を刻みきれていなくて拍の頭がわからなくなるようだった。最後にメロディーをつけたものをみたらすぐ曲名をあてられ階名で歌えたが、その時は先ほどのリズムパターンをあまり意識せず、「歌を歌っている」感覚であった。知っている曲だとリズムを考えるより歌ってしまうようであった。歌は確認にはよいがメロディラインに気を取られ、リズムに集中することがやや半減している。歌と共に左手で四分音符の刻みを入れる練習は一定の拍を刻み続ける練習として効果的であったが、慣れるまで多少の時間を必要とした。

4-5 基本練習の追加と復習2

メトロノームなどで四分音符のリズムを刻んでいると1拍の拍がわかるが、拍間を保てないという指摘もあるため、またクラス②では左手で四分音符を刻む練習が有効だったため、拍間を意識する基本練習【図5】の練習を取り入れた。これは ♩ = ♪ = ♪♩ を理解するために、同じリズムパターンで連続して行う練習である。上3段(1)~(3)と下3段【1】~【3】の右手は同じリズムで、下3段には左手をいれたものになっている。最初右手だけでたたいたリズムと同じリズムに左手を入れることによって拍の刻みを身体で覚えるという練習である。また、最後の一段は、四分音符を左手で均等に刻みながら、右手は今までのリズム(八分音符、付点)繰り返す練習を作成した。八分音符から付点、付点から八分音符とどちらにもいけるようにする練習である。

基本練習

【図5】 <基本練習>

また、付点と八分音符がまざった課題であるリズム練習2の復習（復習2）【図6】をオリジナルで作成し、これには前回の反省点である拍を刻む練習として、まざったリズム練習に左手で刻みを付ける練習も取り入れた。この【図6】復習2と【図5】基本練習を何度も繰り返し確認することによって八分音符と付点のリズムをパターン認識し、それに左手で拍を刻んだ状態にも慣れるようにした。拍間を均等に保つという点を中心に指導する。また一人ずつのチェックも毎回行っていく。

復習 2

【図6】〈復習2〉

4-6 基本練習と復習2の結果と考察

【クラス①】三回目ということもあり、一つ一つのリズムは確認せずいきなりみんなでリズム打ちをするところから始めた。リズムの違いや拍への入れ方がわからず戸惑う学生が多かった。リズムパターンを、タタやターンタのように口で言いながらリズム打ちをすると、感覚を取り戻したようだった。しかし、パッと問題を見せてやらせると、できていたものもわからなくなってしまい、繰り返してできていたように思えてもまだ実践に対応できていないことがわかった。その後、片手で拍を取りながらもう片方の手でリズム打ちをした。1拍にリズムをどう入れるのかを理解するには有効な方法だと思うが、両手での作業が難しいようだった。拍子の感覚を理解したら、付点のリズムもわかりやすくなるだろうと感じた。最後に、一人ずつでの確認を試みた。確実に最初からできる学生は少なく、リズムを感覚と理論的の両面から理解できるまでにはもう少し時間がかかると感じたが、同じことを何度もやることで成長も感じられた。

【クラス②】前回の復習で付点と八分音符を組み合わせたリズムを鍵盤を使って表現させた。全員で弾くと拍間がずれて四分音符の長さが一定にならない為、指導者が和音で四分音符を刻みながら一緒に弾く事で改善された。例題として十六分音符4つで刻む伴奏を付けてリズムを確認すると、徐々に揃い有効であった。生徒によっては四分音符の長さが曖昧で自分の都合で伸び縮みするので、身体の中でしっかり拍子を保てる事が課題となった。練習2のリズム譜からメロディー譜へ移行を復習すると少しずつリズムの表現が生きてきた。「おべんとうのうた」の譜例ではおべんとうの「お」の付点八分音符が短くなる学生が多く注意するように師事した。1拍目の拍間に気を配る様になって効果があった。八分音符と付点の組み合わせの場合、どうしても付点の方がリズムが甘くなり正確な長さを表現できないため、付点の長さを確実に身につけることが今後の課題となる。

【クラス③】クラス③は授業回数が多かった為、特に基本練習を繰り返し行い、一人ずつのチェックも繰り返した。基本練習の上3題に左手で拍を刻んだものが下3題だということをしっかり確認して、この6題を連続してやると拍の刻みはしっかりしてきた。また両手練習では右手の1拍目をたたかず左手で代用している学生が数名いた。右手の1拍目をたたかなくても左手の拍があるとリズム的にはあっているように聞こえるので確かにノリよくたたけているが、最初の1拍目を両手できっちり合わせる事は少し難しい学生もいた。これはピアノで付点を弾く時も1拍目の両手をあわせる所が乱れる事があるので同じ現象だと思い、ゆっくりと確認した。基本練習は慣れてきた頃に、授業の始めにとにかく7題毎回通してみた。両手の練習も次第にパターンとして覚えて乱れることなくできるようになった。基本練習のあと復習2をやると、リズムパターンを身体で覚えているのでできるようになってきた。4拍子

のように音符の量が多くなると乱れやすいので部分練習をしたり、見本をみせたりしながら繰り返し練習した。復習 2 も一人ずつ毎回チェックしたが、友達同士で指摘しあいながら練習したりとクラス授業のよい面がでていたように思う。

5 考察

まずリズム練習の方法には色々なパターンがあるが、手でたたく、机をたたく、ピアノで音をだすというのはそれぞれ少し違った形になる。それぞれに良さがあるが、付点のような 1 拍を 3 : 1 にわせるような細かいリズムの場合は、打鍵することによって音符の長さがはっきりするということが分かった。特に自信がない学生にとっては十六分音符などの細かいリズムの語尾を濁す傾向にあるので、この方法は有効であった。また濁していても本人はあまり気づいていないので、打鍵することによってそのことに気づき、次第にはっきりリズムをたたけるようになる。さらに両手での打鍵においては、左手の四分音符はリズムを刻む四分音符のため、1 拍しつかりのばすというよりやや軽めにたたかないとリズムにのれないので実際ピアノで弾く時の感覚に近くなるということもあり、今後の練習につながるといえる。それは付点八分音符にもいえることで、「あめふりくまのこ」の付点と「おかえりのうた」の付点を比べると、速さのある「おかえりのうた」などの付点は、少し短め軽めに打鍵することになる。特に最終的に歌うということを考えると、付点もスピードによって打鍵が変わるという事を意識する必要もあった。

クラス授業の利点である集団によるリズム練習は、始めは付点も自信なさそうであった学生も次第に元気よくたたけるようになってきた。また、自信がない時は何となく隣を見ながらたたいていた学生も最後は自分の音をしっかり聞きながら行っていた。課題を一題ずつやるのも大切だが、数題通して流れの中で身体で覚える練習も集中するのでよい練習だった。始めは時間がかかっていたが、回を重ねるごとに慣れてきた為、全員が基本練習はできるようになっていた。今回の課題である八分音符、付点のリズムのパターン認識はできたようであるが、全体の拍を刻むという所がまだまだ曖昧なので常に拍を意識することがより必要であった。

6 今後の課題

付点のリズムのパターン認識はできたが、1 拍ずつの拍の刻みがまだ安定していない。メトロノームを横で流していても、それをしっかり聞きながらリズムをきっちりあわせられている学生はまだ多くはない。「リズム感といわれるものの 1 つに拍子感、拍を感じる力、というのがある (呉, 1987) ¹²⁾」ので今後の課題として、1 小節に四分音符がいくつ入っているか理解し何拍目をたたいているのか意識する必要があると思われる。また 2 拍子も 4 拍子も同じ感覚でたたいている様子もみられたので、2 拍子は 1、2 と 4 拍子は 1、2、3、4 と数えながら、それぞれ拍子を感じて行うようにしていきたい。また、アナログのメトロノーム (振り子があるタイプ) を目でみていたら拍を合わせられるようになると個人レッスンの講師からもアドバイスがでているので、視覚からも拍を意識する方法も取り入れていきたいと思う。それぞれのリズムができたならある程度の長さのリズムを刻み続ける練習をし、長い課題でも拍が乱れないようにすることが次へのステップアップである。拍を刻み続けられなければ実際の童謡にかかせない。ある程度の長さになれば拍子の感覚も必要なので、どこが拍の頭になるのかという認識を常に持ち、拍子感も同時につけていくことが必要と思われた。今回のリズムのパターン認識は 1 拍にリズムがどう入るか理解したので、その次の段階として拍の安定と拍子感を目指していきたい。拍がしっかりしているということは相手にも伝わる付点になると思う。

7 おわりに

学生たちはこんな曲が弾きたい、という憧れを持っている。日々の練習では楽しいことばかりではなく、また色々なことに追われていてよほど強い意志を持っていないと練習時間を確保するのは難しい。クラス授業ではリズム練習のあとに学生に童謡の伴奏を弾いてもらい、他の学生に歌ってもらうなどと

いう練習も取り入れている。最初は恥ずかしがったり、間違えたらどうしようなどと言い、なかなか弾きたがらないが、次第に慣れてくるとたとえ間違っても挑戦してくれる学生も増えてくる。

バイエル教本もこのリズム練習も1つの通過点であり、最終的には、子供たちの前で楽しく伴奏ができ、一緒に音楽を楽しみ、そして楽譜を読むことが苦にならないようになればよいと思うが、そこまでには何度も繰り返し様々な方面からの練習が必要といえる。このリズム練習は1つのきっかけではあるが、個人レッスンと並行しての最初の一步としては有効であったので、次へのステップへいけるようにさらなる研究を進めたい。

引用文献

- 1) 杉山祐子『ピアノ初心者のための読譜力評価尺度作成の試み』全国大学音楽教育学会 研究紀要第 24 号、pp.14-15、平成 25 年(2013)。
- 2) 木村聡『自己効力感が高い小・中学生はどのような子供か』ベネッセ教育総合研究所 小中学生の学びに関する報告書、p.6、平成 27 年(2015)。
- 3) 吉村淳子『保育者養成におけるピアノ初心者に対する指導』新見公立大学紀要第 35 巻、pp.77-80、平成 26 年(2014)。
- 4) 別府祐子『ピアノ学習における動機付けと感情との関連—保育者養成校の学生のピアノ学習に着目して—』中国四国教育学会 教育学研究紀要第 62 巻、p.296-297、平成 28 年(2016)。
- 5) 同上、p.297 l.11-14。
- 6) 齊藤美和子『保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題』人間生活学研究第 4 号、p.75 l.49-60、平成 25 年(2013)。
- 7) 別府祐子、前掲論文 4)、p.296。
- 8) 呉暁『ソルフェージュからピアノへ』東京:音楽之友社、p.20 l.10、昭和 62 年(1987)。
- 9) 同上、pp.26-27。
- 10) 杉山祐子、前掲論文 1)、p.14 l.4-12。
- 11) 内田恵美子『保育者・教員養成課程における「ソルフェージュ」指導法の考察』東海学院大学短期大学部紀要 42、p.7 l.4-7、平成 28 年(2016)。
- 12) 呉暁、前掲書 8)、pp.30-31。

参考文献

- 池田貴将編著『図解モチベーション大百科～MOTIVATION IS EVERYTHING～』東京:サンクチュアリ出版、平成 29 年 (2017)。
- 藤井伊都子・鹿島田章子・原田由利子共著『リズム～初歩から応用まで～』東京:音楽之友社、昭和 61 年 (1986)。
- E. L. デシ/R. フラスト共著 桜井茂男=監訳『人を伸ばす力～内発と自律のすすめ～』東京:新曜社、平成 11 年 (1999)。

i バイエル(Ferdinand Beyer,1806~1863)

ii 園の生活の歌とは、「朝のうた」(作詞増子とし 1908~1997 作曲本多鉄磨^{ほんだてつまる}1905~1966)、「おべんとう」(天野蝶^{あまのちよう} 1891~1979 作曲一宮道子^{いちみやみちこ} 1898~1970)、「はをみがましよう」(作詞・作曲則武昭彦^{のりたけあきひこ} 1911~1995)などの楽曲である。